

ユベール・スターン × 船木篤也

シューマンを語る ②



東京交響楽団の今シーズン定期演奏会に、ユベール・スターンが選んだメイン・テーマは、シューマン。そこで、このプロジェクトにかける意気込み、それぞれの交響曲に寄せる思いなどを音楽監督みずからに訊ねてみた。連載・第2回は、本日の演目、交響曲第3番《ライン》を中心に。

(取材／文：船木篤也)



ふなき・あつや
1967年生まれ。
音楽評論家。
「読売新聞」で演奏会評を、FMな

どでクラシック番組の解説を担当。雑誌、コンサート・プログラムにも多数寄稿。東京芸術大学ほかでドイツ語講師をつとめる。共著に「魅惑のオペラ・特別版：ニーベルングの指環」(全4巻、小学館)、「地球音楽ライブラリー：ヘルベルト・フォン・カラヤン」(TOKYO FM出版)、共訳書に「アドルフ 音楽・メディア論」(平凡社)。

—このシューマン・シリーズでは、グスタフ・マーラーが手を加えた版をご使用ですが、これは近代のオーケストラ用にされた編曲であって、原作をゆがめるようなものではないですね。交響曲第1番《春》を聴かせて頂いて改めてそう思いました。

スターン：その通りですね。私はマーラー版がとてども気に入っていますよ。

—しかし、次の交響曲第3番変ホ長調《ライン》では、マーラーはかなり書き換えていますね。

スターン：ホルンをゲシュトップフ(バルに手を入れ音色を変える)奏法で吹かせるとか。

—あるいは、埋もれがちな木管楽器による対旋律を、金管楽器で吹かせたり。

スターン：たしかに変更は多めです。しかし問題になるほどのものではありません。

—加えて、スターンさんは今回ホルンを6本お使いになる(シューマン／マーラーの指定は4本)。

スターン：シューマンが靈感を受けた大聖堂のイメージを、はっきりと打ち出すためです。主題がフォルテで力強く現れる所で、第1ホルンと第3ホルンをダブルで吹かせます。

—ケルン大聖堂の印象が作曲のきっかけになったという話は、本当だと?

スターン：間違いなくと思いますね。もともと、大司教の枢機卿就任式に居合わせたという事実は反証されましたけれどね。重要なのは、この交響曲が1ヵ月以内という短期間で書かれた点です。ドレスデンから移り住んだデュッセルドルフ(ケルンも含むライン地方)で、それだけ強烈なインスピレーションを得たんですね。素晴らしいライン川、そこに住む人々。私もデュッセルドルフから1時間たらずの所、オランダのマーストリヒト生まれですから、よく分かりますよ。カーニバルとか。とにかく陽気、人生を楽しもうという気質でね。しかし、仕事となると、これが規律に欠けた人々で。厳格なプロテスタントであるシューマンは、後になってこれに手を焼きました。

—妻のクララも、「女性合唱団員のおしゃべり、下卑た態度に我慢がならない」と日記に書いています。しかし逆に、オーケストラの側でも、指揮者としてのシューマンに不満がありました。何を言っているのか分からない、棒が読めない等々。

スターン：作曲家や器楽奏者が指揮者になると、そういう摩擦が起こるんです。今日でも同じでしょう。ピアニストとしても指揮者としても優れていた作曲家メンデルスゾーンのようなケースは稀です。交響曲《ライン》も初演は大成功でしたが、二回目にはもう駄目だった。同じオーケストラとやったのにですよ!



photo by S.Ikemoto

—書かれたのは赴任直後でしたから、作品にそうした問題の影はうかがえませんね。

スターン：デュッセルドルフ管弦楽団のコンサートマスター、ヴァジエレフスキが「ローベルトは、デュッセルドルフ人の幸福感がここに反映されていなければならないと言った」と書き残しています。のちに《ライン》という呼称をこの交響曲につけた人です。第1楽章では、ライン川が、辺りの景色が見えてこなければなりません。

—第1楽章の最初の主題は3/4拍子で書かれていますが、ヘミオラ(1・2・3、1・2・3の拍動を、12・31・23とグルーピングし攪乱すること)によって不思議な揺れが出ますね。ここに川の流れの、規則的でない動きがイメージされているとは考えられませんか?

スターン：それを狙ったのかもしれませんが。とにかくこの楽章は生き生きとしていなければなりません。しかし、このヘミオラがあるので、どこまで速くできるかよく考える必要がある。私は、第2ヴァイオリンとヴィオラの「テケテケテケ」という動きに基準をとりますよ(譜例参照)。そうすれば、落ち着いた中にも動きをしっかりと表現できる。



—リズムの不安定さといえば、第2楽章もそう。何も知らないで聴くと、6/8拍子で書かれているように感じかねません。

スターン：いや、これは紛れもない3/4拍子ですよ。テンポ指示に「ほどほどに」とあるでしょう。それを守れば間違えることはありません。日曜日の午後に家族と一緒に心地よく散歩をしている感じ。この楽章で難しいのは、第3ホルンですね。終り近くで、信じられないくらい高い音を出さなければならない。

—ところで、この交響曲の基本となる調は変ホ長調ですね。

スターン：そう。厳かな、大きな、華麗なものを表現するのが変ホ長調です。モーツァルトも、フリーメイソンの背景を持つ曲でこの調を選んでいますが、これは非常に重要な調なのです。

—ワーグナーが《ラインの黄金》を、《ライン》と同じ変ホ長調で始めていますが、これは偶然でしょうか?

スターン：ワーグナーに「偶然」など一つもありませんよ。

昨夜お聴きになったでしょう。第1番《春》の第2楽章、あの最後の箇所は《トリスタンとイゾルデ》そのものではありませんか! 《トリスタン》は、この交響曲よりも後に書かれています。

—シューマンにもワーグナーからの「盗用」がありませんか? 《ライン》の第5楽章に、《さまよえるオランダ人》第1幕の舵取りの歌によく似た箇所(終り近くの金管楽器によるファンファーレ)があります。《オランダ人》は《ライン》より先。2人は同時期にドレスデンにいて、接触もありました。

スターン：いや、盗用の天才は、いつだってワーグナーのほうですよ。ご指摘の箇所では、むしろベートーヴェンの第9の終楽章に出てくるレチタティーヴォのような厳かさが重要です。大抵の人は、ここをさっさと進んでしまいがちです。

—厳かといえば、第4楽章がまさにそうですね。

スターン：第4楽章は一個の奇跡です。見事なオーケストレーションによる、あのポリフォニー(多声性)ときたら!

—あの荘厳な主題は、途中で倍の速度に変わり、第5楽章でさらに速くなって再現されます。こうしたモチーフ上の関連のほかに、この交響曲に統一感をもたらしている要素はありますか?

スターン：ベルリオーズの「固定楽想」ほどではないにせよ、ライトモチーフ的なものがありますね。

—たとえば4度音程とか?

スターン：そう。冒頭主題の最初の音程からしてそれです。

—出版の関係上、第3番となっていますが、実質的には4番目、つまり最後の交響曲です。シューマンの熟達を、どの辺にお感じになりますか?

スターン：やはりオーケストレーションですね。もう誰のアドバイスも要らなかった。以前ならメンデルスゾーンの所へ行っていたでしょうが。なんの修正も要らない作品を、きわめて短期間で書いたのです。つねに懐疑に苛まれていた人間が、いまやデュッセルドルフ市のカペルマイスター、実質上の音楽監督ですからね。自信に満ちていたことでしょう。

—ハイ状態にあった。

スターン：そう。あのカーニバルもありますからね。これはしっかり書いておいて下さいよ。デュッセルドルフとケルンは、カーニバルをめぐって永遠の敵対関係にある!

—どちらが勝ちですか?

スターン：それはやはり、ケルンの方が経済的に余裕がありますからね。いずれにせよ、テレビに映るのはケルンのほうです(笑)